

2 歳児と保育者の間にみられる音楽的行動の特徴について

青 山 真以子

1. はじめに

本稿では、保育者に焦点をあてて音楽的行動の特徴について検討する。筆者は保育園 2 歳児クラスと 3 歳児クラスの観察調査を実施し、生活や遊びの中にみられる音楽的行動の特徴について報告した (2014, 2015a)。これらの報告は、幼児の音楽的行動を生起させた動機という観点で分析した。その結果、2 歳児は「模倣」によって他者に応答し、特に言葉や音声の面白さに導かれて表現を生みだしていた。また、自己をアピールするために音楽的行動を用い、周囲の人と関わりを持つとする姿も観察された (2014:88)。3 歳児は、定型的な言葉の唱えを幼児自身が積極的に持ち出していた。また、幼児同士で音楽的行動を共有して、ピッチやリズムなどの操作を行うという点が特徴的であった (2015a:89)。このように、2～3 歳児は音楽的行動を用いて積極的に他者と関わっていることが示された。その傍らで、幼児が音楽的行動を生起する過程において、保育者も積極的に音楽的行動を持ち出していた。そこで本稿では、保育者が幼児に向けて発信した音楽的行動について検討する。

乳幼児の音楽的行動に関して、これまで幅広い年齢、多様な状況が検討されてきた。乳幼児を対象とした研究に比べると少数ではあるが、保育者による音楽的行動の関与も報告されている。岡林 (2003) は順番交代の場面で交わされる「かーわってー」「いいよー」という応答唱について検討した。例えば、保育者による応答唱は、音楽的な楽しさを含む呼びかけの行為として使用され、順番を交替するための呼びかけのモデル提示として捉えた。岡本 (2001) は、保育者 (I 先生) と 1～2 歳児クラスの幼児との音楽的なやりとりに着目した。岡本は「一定のピッチや抑揚のある話し言葉は、それ自体が I 先生の気分が高揚していることのあらわれであったり、子どもに関わりたいという強い情動からくるものであったり、どのように話せば子どもによりよく伝わるか、あるいは子どもが集中して聞いてくれるかということの工夫のあらわれであったりする」(2001: 66) と述べている。

このように保育者による音楽的行動は、幼児らに対する呼びかけ、何かを伝えようとする意図が含まれていると考えられる。

これまでの研究を概観してみると、乳幼児や乳幼児とのやりとりについては多くの報告がみられるが、保育者の関与に関する報告は多くない。筆者が実施した観察調査 (2014) では、2 歳児クラスを担当する保育者によって多様な音楽的行動による関与がみられた。そこで本稿では、2 歳児クラスの保育者が発信した音楽的行動の事例を通して、その特徴について検討する。

2. 調査の目的と方法

2-1 観察の目的

音楽的行動を抽出するにあたって、熊倉（1999）の論考を拠り所とした。熊倉は、音楽的行動には次の5点が含まれるものと考えた。

- ①既成の曲や即興の旋律を歌ったり、演奏する行動
- ②音の響きを生むことを意図した行動
- ③既成の曲や音の響き、リズムに誘発された行動
- ④言語活動から発展してリズムカルな繰り返しの見られる行動
- ⑤リズムカルな身体運動、音響が介在しない場合でも音楽が想起された行動

観察調査では、これらの点を拠り所に音楽的行動を抽出した。

2-2 観察園の状況

観察園は、東京都西部の広大な団地の一角に位置し、キリスト教精神に基づいた保育を行う私立K保育園である。0歳児から5歳児まで各1クラスずつで編成されている。周辺には畑があり、豊かな自然環境が残っている。月に一回行われる礼拝では神様のお話や讃美歌をうたい、食事前には心を落ち着かせてから挨拶をするなど、生活の端々でキリスト教に基づく保育活動が実践されている。

2歳児クラスの園児数は20人（男児15人、女児5人）で、クラスの半数以上が8月までに誕生日を迎えるため幼児らの月齢はやや高い。2歳児クラスでは、幼児らを4つのグループに分けて生活していた。1グループにつき保育者1人が配置され、日中は4人の保育者が担当した。年度途中で配置の転換等もあり、観察調査中は8名の保育者がクラスに携わった。

2-3 観察期間

2013年4月19日～2014年3月17日の11ヶ月間に亘って、月2回～4回（延べ40日間）観察した。

2-4 観察方法

観察者（筆者）は、午前9時から12時（昼食の途中）まで、保育へ参加しながら観察を行った。観察内容は、音楽的行動の脈略を筆者のメモに記録し、観察終了後にその軌跡を保育記録にまとめた。2013年10月から園に許可を得て、ICレコーダーによる録音調査を開始した。録音データは観察終了後、保育記録と照らし合わせ、事例として抽出された音声データを保存した。個人情報等保護の観点から音声データはできるだけ譜例への反映に努めることとする。

3. 結果と考察

ここでは、2歳児クラスの保育者が発信した音楽的行動から、特徴的な10事例を取り上げて分析と考察を行う。

なお、ここで取り上げた10事例の中には、筆者が音楽的行動を発信した1事例が含まれている。観察調査実施にあたって、筆者は幼児らの生活や保育活動に積極的に参加し、自由にふれあいながら観察を行った。筆者が発信した1事例は、幼児の反応を試行するために行ったのではなく、幼児らとの生活で自然と引き出された音楽的行動である。そこで、筆者による1事例も保育者による音楽的行動と見なして加えた。

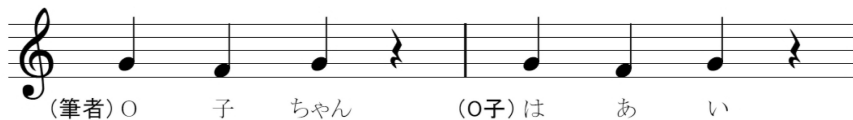
事例1と事例2は、「幼児への呼びかけ」に関する事例である。

事例1．幼児への呼びかけ①

2013年4月17日(水)「O子ちゃん」「はい」(筆者、O子：2歳4ヶ月)

筆者が初めて2歳児クラスに入った日の様子である。子どもたちは緊張しながら筆者の様子をしばらく見ていた。筆者がQ子とパズルで遊び出すと、周囲の子どもたちが筆者に話しかけ始めた。O子は筆者の近くに立ち、パズルで遊ぶ友達の様子を見ていた。筆者がO子の着ている洋服を話題に話しかけると笑顔になり、O子は自分の名前が書いてあるタオルを見せた。筆者がO子の名前を呼ぶとO子は筆者の膝の上に座った。筆者は「O子ちゃん」と3拍で名前を呼びながら、膝を軽く縦に動かした。するとO子は前を見たまま「はい」と返答した。筆者はもう一度このやりとりを繰り返した。

譜例1



事例2．幼児への呼びかけ②

2013年8月19日(月)「どーれがーすきー？」(E先生)

自由遊びの時間、ミニカーで遊んでいる場面である。E先生はミニカーの入ったかごの中からS男が好きそうものを探している。ガチャガチャと音を立ててかごの中を探っては、ひとつひとつ手に取ると「Sちゃん、どーれがーすきー？」とS男に尋ねるように唱えた。

譜例2



事例1は、筆者が関与した事例である。O子は筆者と関わるために近くに来たが、どのように話しかけてよいか分からず、立ちつくしているようであった。そこで筆者が話題を見つけて話しかけたところ、O子は笑顔になり筆者の膝に座ってきた。O子がそのような行動を起こしたことは筆者にとって予想外の出来事であった。そのため筆者は嬉しさを伝えようと、3拍でO子の名前を呼んだ。この保育園では、3拍でクラス名を呼ぶ習慣がある。この拍節感と筆者の呼びかけが同じであったため、O子は筆者と呼吸を合わせられたのだろう。しかし、2歳児クラスではクラス名が呼ばれる際、保育者の声掛けが3拍であっても、幼児らは「はい」と各々伸ばした音声で返事をしている。ここでO子は、保育者と同じ3拍で返答することに、心地よさを感じていると思われる。

事例 2 は、時間外保育を担当する E 先生が唱えた音楽的行動である。E 先生は幼児らと穏やか関わる保育者である。S 男のためにミニカーを探しながら語りかけた言葉がそのまま唱えに変化している。普段、S 男が呼ばれる「S ちゃん（名前の前半部分に“ちゃん”を付ける）」と呼び掛けた後に付点のリズムでリズムカルに唱えられている。

ここで示された 2 事例は個人への働きかけで用いられた音楽的行動である。そのため対象児の名前が音楽的行動の中に挿入されている。保育者は親しみの感情から音楽的行動を持ち出している。

事例 3 は、幼児への共感に関する音楽的行動の事例である。

事例 3. 幼児への共感

2013 年 4 月 24 日 (水) 「なーで、なーで、なーでなで」(B 先生)

給食を食べている場面である。R 男は体に湿疹ができてしまい、とてもかゆがっている。B 先生は「かくとまた血が出ちゃうよ」「お薬ぬってもらってきれいになってきたね」と声をかけながら R 男の食事を補助している。しかし R 男の機嫌は悪く、食事はなかなか進まない。B 先生は R 男の体をさすりながら「なーで、なーで、なーでなで」と唱えた。

譜例 3



事例 3 は、R 男のグループを担当する B 先生の音楽的行動である。B 先生は自己主張をはっきりと示す R 男を近くで見守ってきた保育者である。時には毅然とした態度で R 男と正面から向き合うことある。そのため、R 男は B 先生に特に甘えたりするなど、筆者や他の保育者以上の関係性が築かれている。B 先生が行った音楽的行動は、怪我をした幼児に「いたいいたい、とんでいけー」と唱える、おまじないのようなものである。R 男の不快感に共感しながら、その不快感を取り除こうとする意図があるように思われる。

事例 4 と事例 5 は、幼児への状況説明に関する音楽的行動の事例である。

事例 4 は、おやつを分配する時にみられた音楽的行動である。幼児らにとっておやつはとても楽しい時間である。そのため保育者はおやつを平等に分けようとする。C 先生は自身が数を数えながら、同時に幼児らも卵ボーロを確認できるようにしているようである。音声のリズムは一定で、グループの幼児一人ひとりにその音楽的行動を繰り返した。幼児らは自分の分が配られることを待っていた。数を数える行為は、生活や遊びの中で幼児らにも頻繁に使用される音楽的行動である。

事例 5 は、毎日朝の会で行われている保育者の呼名の様子である。2 歳児クラスでは保育者の勤務状況によって担当保育者が変わることが多々ある。そのため、その日グループを担当する保育者の名前を確認することが習慣になっている。この保育者の呼名で、筆者や実習生、ママ先生やパパ先生を紹介する。保育者の呼名の際には、名字に「先生」を付ける。しかし、ママ先生やパパ先生は幼児の下の名前にママ先生又はパパ先生を付けるために呼び名が長くなる。G 先生は幼児らの呼び方がそろうように指を振っており、まるで

事例4．幼児への状況説明①

2013年4月24日(水) 「いーち、にーい、さーん、しーい、ご」(C先生)

おやつのおぼろを食べている場面である。子どもたちは4つのグループに分かれて生活や食事をすることになっているが、この時おぼろは1クラス3袋しか配分されなかった。袋を開けたD先生は子どもたちに何個ずつ行き渡るか、おぼろを数えている。D先生が「(1人) 5個は大丈夫です」と周囲の保育者に声をかけた。するとC先生は「いーち、にーい、さーん、しーい、ご」と唱えながら子どもたちの前におぼろを置いた。

譜例4



事例5．幼児への状況説明②

2014年2月12日(水) 「L男くんのママ先生」(G先生)

ホールで身体計測をしている場面である。ホールへ移動してきたが、まだ0、1歳児の計測が終わっていない。G先生は時間調整のために朝の会で行う保育者の呼名を始めた。この日L男の母親が“ママ先生”として保育に参加していた(保育を参観しながら場合によって保育者の仕事を手伝ってもらう)。G先生は子どもたちに「後ろ見て」とL男の母親に注目するように声をかけた。するとD男が「Lちゃんのパパ先生」と言った。G先生は言葉を強調するように「ではL君のママ先生(と呼んでね、いくよ、せーの)」と言うと「L男君のママ先生」と全員で唱えた。唱える際には「L、男、くん、の、ママ、せん、せい」と7回右手の人差し指を縦に振った。

譜例5



指揮をしているようであった。

事例6～事例10は幼児に特定の行動を促すために用いられた音楽的行動である。事例6は、既成の歌を用いて行動を促そうとしている。

事例6．幼児の行動を促す(既成の歌)

2013年8月19日(月) 「おちゃをのみにきてください」(G先生)

クラスでの自由遊びの後、子どもたちはベランダに設置してあるシャワーを順番に浴びている。シャワーが終わった子どもたちに水分補給をさせようと、G先生は麦茶の入ったコップを机に置いた。そしてG先生は子どもたちを見回しながら「おちゃをのみにきてください」と歌をうたった。

譜例6



事例6は既成の歌を用いた音楽的行動である。これはわらべうた「おちゃをのみにきてください」の冒頭部分である。G先生は水分補給（麦茶）を促すために歌をうたった。筆者の研究（2015b）において2歳児が既成の歌唱を音楽的行動として持ち出す事例がみられた。2歳児は既成の歌をその場の状況や物事と関連させていた。しかし保育者の音楽的行動では、歌によって幼児が楽しみながら保育者が意図した行動ができるよう配慮されていた。

事例7と事例8は、保育者が幼児らの行動を指示するために持ち出した音楽的行動である。

事例7．幼児の行動を促す（指示）①

2013年8月19日（月）「まってね」（H先生）

おやつ時間にウエハースを食べている場面である。ウエハースのおかわりがグループにまわってきたが、全員の分はなかった。そこでH先生は立方体のウエハースを4つに分けようとする。しかし、それを待てない様子の子どもたちは「ちょうだい」と言いながらH先生の前に手を出す。H先生はN男に向かって手をパーにして押しとどめるように「まってね」と唱えた。子どもたちは落ち着いて待っていた。

譜例7



事例8．幼児の行動を促す（指示）②

2014年2月10日（月）「すわります」（H先生）

朝の自由遊びの時間である。G男、H男、I男はブロックを剣に見立てて遊んでいる。興奮が高まると戦いごっこが始まってしまうため、保育者は子どもたちが剣を交えるようなポーズをする。「（戦いごっこは）しないよ」と声をかけていた。子どもたちがつなげたブロックは、長さが40～50センチあり少し危険である。両手に剣を持ったH男が立とうとした時、H先生が手を広げて制止するように「すわります」と唱えた。

譜例8



事例7と事例8は、幼児への指示や危険な動きを抑制するために用いられた音楽的行動である。事例では「待ってね」「座ります」と端的に幼児への指示が示されている。どちらの事例もH先生による音楽的行動である。H先生は事例の場面で普段よりも声のトーンを落として唱えていた。幼児らと関わる際、声のバリエーションは保育者の幅を広げる要素の一つである。絵本や紙芝居の読み聞かせでは声色を変化させることで色々な役を表現することができる。また筆者は避難訓練での声の出し方を指導された経験がある。声のバリエーションは幼児に伝える可能性を多分に持っているのだ。さらにこれらの事例でH先生は手の動きを用いている。視覚的な効果もここではあるように思われる。

事例9と事例10は、幼児に身体的なイメージを想起させるために用いられた音楽的行動である。

事例9. 幼児の行動を促す（身体のイメージ）①

2013年11月8日(金) 「ぺったん、ぺったん、ぺったんたん」(G先生)

朝の会を行っている場面である。子どもたちは椅子に座り、これから行う活動について話を聞いている。G先生はネギやオクラなどの野菜を絵の具につけ「ぺったん、ぺったん、ぺったんたん」と唱え、野菜のスタンプをやってみせた。

譜例9



事例10. 幼児の行動を促す（身体のイメージ）②

2013年10月19日(水) 「ゴクゴクゴクゴクゴークゴク」(B先生)

おやつ時間の様子である。2歳児クラスでは牛乳を飲み終わった子どもからおやつを配ることになっている。S男が飲んでいた牛乳を故意にこぼしたため、B先生が「そういうのやだ」と声をかけた。するとS男は声を上げて泣き始めた。B先生はS男に「泣くのは赤ちゃん、さあSちゃん(牛乳を)飲むよー、みんなみてー」と言い「ゴクゴクゴクゴクゴークゴク」と唱えながらS男に牛乳を飲ませた。

譜例10



事例9は、野菜スタンプのやり方を音楽的行動で示した事例である。G先生は野菜スタンプで使用するピーマン、ネギ、オクラ、大根、ニンジン、じゃがいもなどの野菜を持って来た。幼児らは初めて行う野菜スタンプにとっても興味を持ち、楽しみにしていた。野菜スタンプを行う際は、野菜を紙に押しつけることが重要である。野菜を絵筆のようにこすりつけてしまうときれいな形にならない。G先生は説明の中で野菜をしっかり押しつけてから離すという動作を強調していた。この音楽的行動を用いることで、幼児ら自身が口ずさみながら腕の動きができるように誘導していた。

事例10は、S男に牛乳を飲んでほしいという保育者の思いから生まれた音楽的行動である。B先生は、S男が牛乳をこぼしたことを叱ったが、気持ちを切り替えて牛乳を飲むように勧めている。ここでB先生は、身体的なイメージを唱えることによって幼児自身の行動を励まそうとしていた。

4. 今後の課題

事例は、保育者の意図や目的に応じて次のように分類された。「幼児への呼びかけ」「幼児への共感」「幼児への状況説明」「幼児の行動を促す（既成の歌）」「幼児の行動を促す（指示）」「幼児の行動を促す（身体のイメージ）」の6つである。事例にみられたように、2歳

児クラスの保育者は、幼児に親しみを持って呼びかけ、思いに共感するために音楽的行動を用いていた。また、音楽的行動によって状況を分かりやすく説明し、その場で必要な行動を幼児に促すような意図も含まれていた。保育者は音楽的行動を通して、幼児と情動的なつながりを築き、集団生活の決まりについても伝えようとしていた。このような意図は、幼児間の音楽的行動ではみられなかった特徴である。加えて、保育者は声のパリエーションと動きによって音楽的行動に変化を加えていた。これらは保育者による音楽的行動の特徴として読み取ることができるだろう。

今後は、音楽的行動を引き起こす動機という観点からも保育者の音楽的行動の特徴について検討したい。また3歳児以降の幼児についても保育者はどのような音楽的行動を持ち出しているのか、研究を継続していきたい。

引用文献

- 青山真以子 2014 「2歳児における音楽的行動の特徴に関する研究—一人との関わりに焦点をあてて—」『音楽研究：大学院研究年報』第26輯：81—89
- 青山真以子 2015a 「3歳児における音楽的行動の特徴に関する研究—一人との関わりに焦点をあてて—」『音楽研究：大学院研究年報』第27輯：83—90
- 青山真以子 2015b 「幼児の音楽的行動の特徴に関する研究」『国立音楽大学修士論文』
- 岡林典子 2003 「生活の中の音楽的行為に関する一考察—応答唱《かーわって・いいよー》の成立過程の縦断的観察から—」『保育学研究』第41巻第2号
- 岡本祐子 2001 「保育における音楽的なやりとりを通して子どもたちが学ぶものは何か—ある保育者と1・2歳児との関わりから—」聖和大学博士論文
- 熊倉妙 1999 「保育園5歳児クラスにおける幼児の音楽的行動—その動機を中心に—」『国立音楽大学修士論文』

The Characteristics of Musical Behavior Observed among 2-year-old Children and Their Caregivers

Maiko, AOYAMA

This paper examines the characteristics of musical behavior particularly focusing on caregivers. The author has previously conducted an observational survey on two- and three-year-old children at a day-care center and reported on the musical behavioral characteristics that were observed during their daily life and play (Aoyama 2014, 2015). These characteristics were analyzed in terms of the motives behind the children's musical behavior. The results showed that two- and three-year-old children use musical behavior to interact with others. Concurrently, it was found that the caregivers also actively engage in musical behavior when encouraging young children to do the same. In light of this, this paper examines the methods through which caregivers encourage musical behavior in young children.

Observations were made of two-year-old children at a private day-care center, K. The observations were conducted on 40 days over an 11-month period between April 19, 2013 and March 17, 2014.

As a result of the analysis and discussion of the cases, the behavior of the caregivers was divided into the following six categories: "addressing children," "empathizing with children," "explaining circumstances to children," "encouraging children to act using existing songs," "encouraging children to act by giving instructions," and "encouraging children to act using body language." The caregivers in charge of the two-year-old children used musical behavior to intimately address the children and to empathize with them. Moreover, their musical behavior was used to explain circumstances clearly and to encourage children to take appropriate actions for these circumstances.

Plans for future research include examining the characteristics of musical behavior in caregivers in terms of the motives behind their behavior.